（様式６－１）

実績概要（ホームページ掲載用）

研究又は活動のテーマ	鹿児島県および周辺地域に建設された石造水路橋に関する調査・研究
助成事業者	第一工業大学
代表者	本田泰寛

（目的）

農業用水施設である石造水路橋は、**地域社会発展の重要な物証となる土木遺産**であるが、近年は放置・撤去が進みつつある。将来的な保存/撤去の議論や、土木遺産を生かしたまちづくりに資するべく、鹿児島県および宮崎県の一部に残る石造水路橋のリストアップと実地調査によって基礎的なデータを収集・整理し、さらに土木史的な視点からの分析・考察を本研究の目的とした。

（概要）

1. 継続調査の成果

昨年度に引き続き、鹿児島県及び宮崎県に現存する石造水路橋の調査を実施し、新たに3橋（いずれも鹿児島県）の存在を確認することができた。その結果、対象地域には現時点で27橋の石造水路橋が現存することが明らかとなった。

2. 土木史的側面からの分析･評価

網羅的な調査結果を分析したところ、①石造水路橋の多くは明治期～昭和初期にかけて建設されていること、②特に志布志周辺において集中的に石造水路橋が建設されていること、の２点が明らかとなった。これは、本県の石橋架橋が有する「江戸期・薩摩藩における岩永三五郎の架橋」という一般的な見解とは異なる傾向を示すものである。

その要因を解明すべく、江戸期／明治期以後の比較を念頭に、農村支配体制や開田事業に着目した史的分析をおこなった。その結果、明治期以降の志布志周辺に石造水路橋群が建設された背景として以下の点を明らかにした。

①藩による農民統制の消滅：個人の発案による開田事業の展開が可能になったことで、明治期以後には多様な開田事業が展開されはじめた。

②集落レベルでの開田の開始：藩財政の安定化を目論む平野部での大規模開田とは異なり、集落の増産を目指すために山間部の狭小地での開田が展開された。その結果、水路橋を要する地形条件下での水路開削が実施されるケースが多くなった。

③石工による開田事業の発案：開田事業の発起人が石工であった場合、水路開削時のルート選定において水路橋を要するルートの選定が可能となった。

これはつまり、封建色の強い藩政下では実現困難であった「地方が主体となった地域開発」が、明治期になって初めて可能となったことを示唆しており、現存する石造水路橋群その重要な証左であると考えることができる。

3. 調査結果の公表

本研究の成果は、平成27年度土木学会西部支部研究発表会（3月6日・九州産業大学）において公表することができた。また、重要な土木遺産である石造水路橋の存在を周知するため、調査にて撮影した写真をパネル化し、石橋記念館エントランスロビー（平成27年11月7日から平成28年1月31日）及び霧島市シビックセンターの待合ホール（平成28年2月8日～20日）での展示を実施した。これらのパネルは石橋記念館に寄贈され、エントランスロビーでの展示が既に再開されている。